

## エチオピアのコーヒーとフェア・トレード

### NPOハーベスト・タイムの試み

児玉由佳

日本において、エチオピアのコーヒーのフェア・トレード等による現地支援をめざして活動を始められたNPOハーベスト・タイム(以下、HAT)代表の津田久美子さんに、2006年5月にお話を伺いました。

— ハーベストタイムの活動は、いつから始まったのですか。

2005年3月から設立準備を始めまして、その年の8月に設立許可が東京都から出ました。東京都にNPO設立の申請書を出したのですが、審査は厳しくて大変でした。

— どのような審査だったのですか。

たくさんの方のNPOが申請を出していて、そしてたくさんつぶれているから厳しかったのだと思うのですが、それだけではなく、設立目的や活動内容を書くにあたっては独特の書き方があって、こちらで作ったものは受け入れてもらえず、都側の基準に合わせて何度も書き換えることになりました。特に私たちは、ただ寄付をもらうということではなく、コーヒーを貿易・販売するというので、その収入をどのように使うのか、なぜ会社にしなくてNPOなのかといったところで厳しい質問がありました。

— HAT設立を思い立たれたきっかけは、どのようなものですか。

私は現在、エチオピア大使館で通訳・翻訳を行っています。そこで大使が、大学などでエチオピアの状況についてスピーチをされる時に同行して通訳をする機会がずいぶんありました。

大使のお話では、エチオピアの経済はコーヒーにかなりの部分を頼っていて、国際価格が変動す

ると大きな影響をうけることになり、そのなかでも特に、農民が影響をうけることになるというものでした。いくら良いコーヒーを作っても受け取る金額はあまり変わらず、豊かになれない。その一方で、大きな国際企業は先物取引などを利用して安くコーヒーを買って、それを世界市場で何倍もの価格で販売することで、その企業だけが大きな利益をえることができます。そこでモカ・コーヒーを、コシヒカリのようなブランドとして売ることができないだろうか、というのが大使のご意見でした。

このようなお話を聞きながら、農民に直接利益をもたらすためには、フェア・トレードが有効なのではないだろうか、考えたのが始まりです。

— どのような方々が活動に参加されているのですか。

まだメンバーは限られていて、主婦の人たちが中心です。いつも一緒に活動しているのは3人ぐらいです。他にボランティアとして、コンピュータに精通している方とか、コーヒー関係のお仕事をされていらっしゃる方、ほかにも国際協力関連のNGOの人たちなどがメンバーになってくれます。ただ、みなさんお仕事が忙しいので、いつも一緒に活動というのは難しいです。

— どのような人たちからコーヒーを買われているのですか。

エチオピアの、フェア・トレードの資格をもつコーヒー生産者組合から購入するようにしています。ただ、日本でフェア・トレード・コーヒーとして売るためにはいろいろと決まりがあるので大変です。

— どのような部分が大変なのでしょう。

日本でコーヒーなどをフェア・トレードとして販売するためには、まず、そのための資格をとらなければいけません。それ自体はフェア・トレード・ジャパンのような認証団体へ申請すればよくて、そんなに難しくはありません。

ところが、生産者と私たちの間を仲介する輸入業者もフェア・トレードの資格がないとだめなんです。でも、その資格のある輸入業者の数がひじょうに限られているのが大きな問題なんです。彼らはビジネスでやっているのだから、フェア・トレード・コーヒーがまだあまり売れないために、品目を増やさずに1、2種類位しか取り扱ってくれません。日本ではフェア・トレードの考え方が定着していないので、コーヒーの販売会社もせいぜい企業のイメージ・アップのレベルで、フェア・トレードを主流にしようというところは少ないんです。

そのため、HATも、豆を買おうにも、フェア・トレードの資格のある輸入業者が決めた豆しか買えません。他の種類の豆を輸入業者に買ってもらうには、ほかにも買い手がいないとだめだといわれてしまいます。

したがって、HATでフェア・トレード・コーヒーとして販売できるのは、その1種類と、それに他の豆を混ぜたもの——モカ・ミックスとして売っているのですが——の2種類だけになってしまいます。

フェア・トレードに理解のあるコーヒー会社に相談したら、フェア・トレード商品として高く買うことだけではなく、フェア・トレードの資格を持つ生産者から買うことでその利益を還元すれば、結果的には援助することになるのでは、とアドバイスされました。現在は、フェア・トレード・コーヒー以外にも、フェア・トレードの認証を持つ生産者組合で生産されたコーヒーを買うことにしています。ただ、これでは本当にフェア・トレードであるといえるのか苦しいところでもあります。将来的には、フェア・トレードの輸入資格を取得することも必要な、とは考えています。輸入業者の資格を取得すれば、焙煎したものではなく、生豆を直接コーヒー会社に売り込むこともできるようになります。

— 輸入業者でフェア・トレードの資格を取得するには、どのような条件があるのですか。

まず、お金がかかります。最初に20万円位かかるそうです。他にも、毎年7万円位はいるみたいです。それに年4回ぐらい報告書を提出しなければいけないようです。手続きの煩雑さもあって業者がなかなか資格をとらないというのが、輸入業者の数の少ない理由の一つのようです。それに資格のためには、今までどれくらい輸入してきたかなどの実績も必要です。

将来的に資格が欲しいとは考えていますが、資格をとって即座にコンテナにコーヒーを積んで運んでこられるかという点でもなかなか難しいものがあります。

加えて20万円という金額をさっさと払えるほどHATで利益が出ているわけでもありません。自腹で資格をとることも可能ではありますが、悩ましいところです。

— 輸入業者になったとしたら、1回当たりどれくらい輸入しないといけないのですか。

1回当たり、250～300袋＝15～18トン（1袋60キロ）なので、フェア・トレード・コーヒーを購入してくれる会社を見つけておかないと、とてもやっていくことはできません。どのように販路を見つけていくかは、ビジネスのことをまだあまり知らないのだから、これからの課題です。

— 豆はどれくらいもつんでしたっけ。

おいしい賞味期限は1年ぐらいです。ほんと、これからチャレンジですね。

— 現在HATで扱われているコーヒーの種類は……

100%フェア・トレード・コーヒーのもの、多少フェア・トレード・コーヒーが入っていればフェア・トレードの認証を使用できるので、フェア・トレード・コーヒーとそうではないコーヒーを50%ずつ混ぜた「モカ・ミックス」があります。他にも、フェア・トレードの認証をもつオロミア・コーヒー農民協同組合連合で生産されたコーヒーを4種類扱っています。

「モカ・ミックス」は、サンドライとウォッシュド・コーヒーをミックスしたもので、おいしくできています。モカブレンドは、モカが最低40%を入れなければいけないのですが、うちのミックスはモカ100%ですので普通のモカブレンドとは違います。

— こだわりの点は。

焙煎にはこだわっています。30年ほどコーヒー

焙煎をされている方がいて、その方をお願いしています。その方のコーヒー店は、HPにも掲載していますが、その界限ではおいしいコーヒーで評判のところですよ。その方が、うちの活動に賛同して下さっているので、もちろんビジネスではありませんが、焙煎をお願いしています。ほんとうにおいしいので、ぜひ飲んで頂きたいと思っています。

— 買い付け先は、オロミア農民協同組合連合からということですが、ここしかフェア・トレード活動をしていないという情報は本当ですか。

他にも二つくらいあります。オロミアはすでに完成した大きな組織で、オロミア州だけでなく広範囲をカバーしています。欧米の NGO とも関係を構築しています。他のシダモとかイルガチェフェの協同組合はまだまだ小さいようです。

コーヒーだけでなく、エチオピアのことを知って頂きたいので、いろいろな形をとおして、コーヒーと一緒に紹介していきたいと考えています。コーヒーをいくら買ったところで、一部の人にしかいかないので、どれぐらいの利益があれば、還元できるのかを考えていきたいです。

いままでのエチオピアで見えない、光の当たっていない部分を紹介できないだろうかと考えています。エチオピアに関係した活動をしている他の NPO の方たちとともに、少しずつ活動の輪を広げていきたいと考えています。よろしく願いいたします。

— どうもありがとうございました。

(聞き手：こだま・ゆか／アジア経済研究所)

HAT ホームページ <http://www.hatime.org/index.html>

### NPO ハーベスト・タイム(HAT)、「みなと区民まつり」(10月7~8日)に出展参加

10月7~8日、港区の芝公園一帯で開催された毎年恒例の「みなと区民まつり」のメイン企画の一つである「世界のお酒とグルメの散歩道」で、HATは、各国の酒や料理に交じって、エチオピア・モカ 100% コーヒーを紹介、販売も行いました。

直前に焙煎したイルガチェフェ、リジェンドモカ、ハラー・ロングベリーの豆を用意。注文を受けてからドリップで抽出。モカコーヒーの豊かな香りがブースの内外に広がり、大勢のお客様に大変贅沢な淹れたてピュアモカコーヒーを味わっていただきました。

また、エチオピアの伝統文化「コーヒーセレモニー」を実演紹介しました。見学された方はコーヒーに対する認識をあらたにされたようでした。

各国ブースの出展者は、ほとんど商店や専門業者。イベントを訪れた方々は、HATがNPO法人として、収益はフェア・トレードなどを通して農民支援に充当していることに大変驚かれ、共感していただきました。

(津田久美子)



フェア・トレード・コーヒーをアピール

